展示解説シート

芭蕉年譜

年号	西暦	年齢	年譜事項
寛永21年	1644	1	伊賀国上野赤坂(三重県伊賀市)に生まれる(一説に柘植説あり)。幼名金作、長じて忠右衛門、甚七郎を(甚四郎とも)称す。父は松尾与左衛門、兄は半左衛門、姉一人妹三人。
明暦2年	1656	13	2月18日、父、与左衛門没。伊賀上野、愛染院に葬る。
寛文2年	1662	19	この前後から、藤堂藩伊賀付侍大将藤堂新七郎良精の嫡子良忠(俳号、蟬吟)に仕え、忠右衛門宗房と名乗る。蟬吟とともに貞門派の季吟に師事し俳諧に親しむ。
寛文6年	1666	23	4月25日、良忠(蟬吟)没。25歳。
寛文12年	1672	29	1月25日、伊賀の俳人らの句に宗房の判詞を加えた発句合『貝おほひ』を伊賀上野の天満宮に奉納。江戸に下る。
延宝2年	1674	31	3月17日、季吟より俳諧秘伝書『埋木』の伝授を受けるか。
延宝3年	1675	32	5月、西山宗因の東下を歓迎する百韻興行に桃青の俳号で加わる。
延宝4年	1676	33	夏、帰郷して甥の桃印(16)を連れて江戸に戻る。
延宝5年	1677	34	この頃から、神田上水関係の仕事に携わる。
延宝6年	1678	35	この年もしくは前年春に俳諧宗匠として立机。立机披露の万句興行を催す。
延宝8年	1680	37	4月、『桃青門弟独吟二十歌仙』刊行。杉風・卜尺・其角・嵐雪ら優秀な門弟を擁し、江戸俳壇に勢力を確立。秋「枯枝に烏のとまりけり秋の暮」吟。冬、杉風(日本橋小田原町の幕府御用魚問屋)の尽力により、深川の草庵に移る。当初、庵を泊船堂と称した。この頃、深川臨川庵に滞在中の仏頂禅師と交わる。
延宝9年	1681	38	春、門人李下から芭蕉の株を贈られる。これが、庵号・俳号の由来となる。秋「芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉」吟。
天和2年	1682	39	3月、千春編『武蔵曲』入集の句に、初めて「芭蕉」の俳号を見る。12月28日、駒込大円寺に発した大火(八百屋お七の火事)で芭蕉庵類焼。
天和3年	1683	40	其角編『虚栗』刊行。天和新風を示す。6月20日、郷里の母没。冬、門人らの寄付金で、再建された第二次芭蕉庵に入り、「あられきくやこの身はもとのふる柏」吟。
貞享元年	1684	41	8月、門人千里を伴い『野ざらし紀行(甲子吟行)』の旅に出る。「野ざらしを心に風のしむ身哉」吟。貞享調を確立。冬、荷兮編『冬の日』刊行(貞享2年か)。伊賀で越年。翌年4月末に帰庵。
貞享3年	1686	43	春、「古池や蛙飛び込む水の音」の句を巻頭に、衆議判『蛙合』興行、仙化の編で刊行。荷兮編『波留濃日』刊行。
貞享4年	1687	44	8月、曾良、宗波を伴い『鹿島紀行(鹿島詣)』の旅。10月11日、其角亭で「旅人と我名よばれん初しぐれ」吟。25日、東海道を下り『笈の小文』の旅に出る。郷里で越年。
貞享5年	1688	45	2月18日、亡父三十三回忌法要に列席。3月19日、杜国(万菊丸)を伴い、吉野の花見の旅に出る。8月11日、越人を伴い、『更科紀行』の旅、下旬に江戸へ帰る。9月13日、芭蕉庵で後の月見の会を催す。
元禄2年	1689	46	2月末、芭蕉庵を人に譲り、杉風の別墅に移る。「草の戸も住替る代ぞひなの家」吟。3月、曾良を伴い東北、北陸を経て、大垣までの『おくのほそ道』の旅に出る。膳所で越年。荷兮編『曠野』刊行。この冬、初めて不易流行論を説く。
元禄5年	1692	49	5月中旬、新築の第三次芭蕉庵に入る。「芭蕉を移す詞」『芭蕉庵三日月日記』成る。
元禄6年	1693	50	洒堂編『深川』刊行、「かるみ」への新意欲を示す。3月下旬、甥桃印(33)芭蕉庵で病没。7月中旬から約1か月間、門戸を閉ざして、「閉関の説」を書く。
元禄7年	1694	51	4月、素龍清書本『おくのほそ道』成る。5月11日、次郎兵衛を伴って上方へ。「かるみ」を説く。6月2日、芭蕉庵で寿貞没。野坡・利牛・孤屋編『炭俵』刊行。京、伊賀上野、奈良を経て大坂へ。9月10日、之道宅で発病。10月5日、病床を大坂御堂前、花屋仁右(左)衛門方の貸座敷に移す。10月8日「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」吟。10月12日、午後4時ごろ没。遺言により遺体を大津の義仲寺に移し、14日埋葬。其角編『枯尾花(芭蕉翁終焉記所収)』刊行。翌年、支考編『笈日記』、路通編『芭蕉翁行状記』刊行。沾圃編『続猿蓑』元禄11年刊行。『おくのほそ道』(井筒屋本)元禄15年刊行。

※年齢は数え年

江東区芭蕉記念館